



奇談 冒險

少女

島

(二)

永代美知代



私は日本の少女

▲船室内の怖ろしい會話▼

まゆみは何處とも知れず運ばれてゆく船の中で、ふと眼をさました。天井の低い下等な船室に、自分と同じ十一二から八歳ぐらゐまでの少女が二十人ばかり、汚ない寝臺の上に死んだやうになつて昏睡してゐるのを見ると、まゆみはあの恐ろしかつたことを思ひ浮べて、その眼には熱い涙が湧いた。

「キングス博士がどんなにか心配して被在るだらう？ 私のお父様も——此室へ擡

はれてきた皆さんのお家では、どんなにか騒いで被在るだらう？ 擡つたのは何者

で、どんな目的か知らないけれど、あんまり手段が卑怯だ、慘酷だ、下等だ！」

さう思ふと、勝氣なまゆみは自身の不幸や危険を忘れて、みんなのために、皆を

救ふために、力一杯の事をして見ようと決心した。

「今に私が——ねえ皆様——私は日本の少女ですもの——」

心中にさう誓つた時この船室の外から大きな錠を外す音がきこえた。扉が開けられ、三四人の男が大聲で話しながら室内へ入つて来た時には、まゆみは寢床に倒れて昏睡した振りを装つてゐた。

「あゝ、まだ一人も覚えてゐないね。」

「結局面倒でなくて結構です。」

「うん、然し明日の朝は早く島へ着くんだからナ。」

「ロンドンではまた大騒ぎでせうナ。」

「警察は血眼さ。然しオランダの國旗を利用して、

「少女島獄と云つた方が可い。」

「然し、囚人が皆無邪氣なので、ちつたア可哀さうにも思ひますねえ。」

「莫迦な、ドイツの——國家のためを思ふ者が、そんな女々しいこつてどうする？」

はつとして、まゆみは細く眼を見開いた。忘れもせぬ、キングス邸の葦木へ現はれた藤原の紳士がその首領で、自分とアスターとに麻酔劑仕込の黒風呂敷を被せた若い船員も一緒に立つてゐる。

「ドイツの探偵だ！」

まゆみは然らう知ると、身體中の血が一度に逆に流れるやうに感じた。

「全くです、巧く成功したいものですねえ。」

と若い船員が云ふも、艇の首領はうなづいた。「眼を覺ました奴から、一人々々手紙を書かす可い。前に誘拐した少女達の手紙は、この船が出る前にロンドンで投函したから、今度この二十何人をおの所謂少女島へ送りつけて、またロンドンへ引返し

堂々とテムス河から海へ乗り出したこの汽船に二十何人の少女が誘拐されて積み込まれてゐるとは、



神様のはか御存じあるまいナ。」

「前に三十何人、今度が二十何人、これちやアあの島も、少女島と改名しなくちやなりませんまいよ。」

た時に効力が現はれてゐるのだ。」

「さうです、平常偉ぶつてゐる大先生達も、娘の命が惜しさに、何でも娘の手紙通り、此方の要求を聞き入れるでせう。秘密の地圖でも、外交書類でも、發明の秘密でも、金でも何でも、はッ／＼／＼は。彼等と一緒に心地よげに高笑ひをした。まゆみは餘りの憎らしさに我を忘れて、愛らしい眼を大きく見開いて彼等を睨みつけた。

気が狂れた眞似

▲艇の男は探偵の頭▼

「おや、この少女は眼を覺ましたとる。」

艇にもまゆみの容子に眼をとめたあから顔の怪談は、つと、まゆみの傍に寄つて鋭い聲で、

「起きろ！日本の少女。」

と怒鳴つた。

すると、どうしたのであらうか、まゆみは忽ち寢臺の上に起ち上つて、大口を開いて、面白さうに笑

ひだした。手を叩いて笑ひ初めた。

「此奴、氣でも任れたのかー」

根ら顔を一層赧くして、獨探の首領は怒つた。鐵拳を固めて、あはや、まゆみの頭を擽りつけようとする、その時、まゆみは又がばと寢臺に倒れ伏して、急に悲しい聲をはりあげて泣きだした。

「ロッグさん、これは確かに發狂したのですよ。麻酔劑が效き過ぎたのでせう。宜しい、私が一つ療治してやりませう。あなたは一休みお休みなさい。」



若い船員がさう云ふと、根ら顔のロッグは舌鼓を打つて、他の部下を従へて船室の外へ出て行つてしまつた。

「まゆみさん、僕はあなたの味方なのだ。心配しないで可いんです。あのロッグといふ根ら顔の男はね、アメリカ人とドイツ人との混血兒で有名な獨探なんです。僕は二年ほど前から、ロッグの部下になつて秘密を探つてゐるんです。

「僕ですかー僕はマックス・ホーンと云ふ米國人だが、僕の母ー懐かしい懐かしい僕の母は、まゆみさん、あなたと同じ日本人なんです。——そして僕は——」

そしてロッグのする悪事を、後から／＼壞してしまふ。然し今度ばとても許せないことがあるから、近い間に捕縛してしまふつもりなのだ。その時には是非まゆみさん、あなたにも手傳つて頂かなくちやならん。然し、愈々といふ時までは、僕は勿論、あなたも夢にもそんな素振りを見せてはならん。

彼は、かういふ間にも心を緩めず、忙しく扉の方を幾度も振り顧つた。

「いよ／＼といふ時までは、下らぬ事に抗はらないで、ロッグのいふ通りにして下さい。僕はあなたを救ふのは勿論、こゝにある二十何人の少女と、今、英國海峡のある無人島に押し込められてゐる三十何人の少女とを、残らず助け出さなくちやならんのだから。」

まゆみは、この若い船員の澄み切つた眼を眺めてゐるうちに、「この人は悪い人ぢやない。」と感じた。しかし、まだ／＼用心しなければならなかつた。

「あなたはどなたですか。」

「マックスー 何時までそんな氣狂にか入り合つてゐるんだ。見る。少女は大抵覺めかゝつてゐるぢやないか。さつさと手紙を書かなくちやア、船が着くまでにもう六時間しか無いぞ。島に着いて少女等を揚げると、すぐロンドンへ引返さなくちやならんのだからねー」

と言つて急ぎ立てた。

若い船員マックス・ホーンは、何喰はぬ顔をしてマックスを見返しながら、

「え、今すぐに行きます。どうもこの少女は確かに氣が狂つたのですよ。」

と言ひながら立ちあがつた。